

霧島温泉から桜島を望む

球磨川流域を巡って南九州へ (30.1)

船本 浩路

数年前から、毎年の恒例となりつつある学生時の同窓会が昨年10月にあった。幹事は持ち回りで、開催地の段取りを含めて引き受けていただく流れとなっている。今回の開催地は鹿児島・霧島温泉との連絡が入った。私の学び地は九州である。同窓の仲間も九州を中心に西日本に散らばっていることから、開催地は大阪からは遠方のことが多い。そのためだけに遠方まで出かけるのは少しもったいない気がして、いつもその前後に個人的なオプションを取り入れた旅の計画を立てている。今回は霧島温泉ということで、私の頭には二つのオプションが浮かんできた。一つは憧れの球磨川をこの目で見る。今一つは、十数年前からやっている普通列車による JR 全線乗車だ。今回はうまい具合に球磨川を知るには、JR の未乗車区間である肥薩線（八代駅～隼人駅）に乗るのが一石二鳥だとわかった。

<肥薩線と球磨川>

同窓会の前日に格安のピーチ航空で鹿児島に入った。関空から飛行時間約 55 分。あっという間に鹿児島だ。まずは、鹿児島中央駅から九州新幹線の未乗車区間である熊本駅まで乗車した。こればかりは普通列車で行けない。そして八代駅へ。九州の駅弁ランキング3年連続1位の活字に誘惑されて駅前で見つけた「鮎屋三代」というアユ弁当（写真右下）を買って、さあ、これから憧れの球磨川を見るぞ！ 肥薩線は八代駅（熊本県）から隼人駅（鹿児島県）までの 124.2km の路線である。八代駅から人吉駅までは球磨川に沿って走ることから川線と呼ばれている。八代駅を出てすぐに大



きな川が見えてきた。球磨川の河口付近である。球磨川は熊本県南部を流れる全長115km、日本三大急流（あと二つは山形県の最上川と静岡県の富士川）の一つと称される九州の大河である。巨アユが釣れることで有名で遠方の釣り師にとっては一生に一度は竿を出してみたい川である。乗車した肥薩線は人吉駅までは球磨川に寄り添うように走っている。早速、カメラを構えてシャッターチャンスを待った。狙う被写体は坂本駅すぐ上の荒瀬ダムである。というのはコンクリートのダムでは全国初の試みである撤去工事がここでされており、地元どころか全国でも非常に大きな関心事になっている。気合を入れて構えていたがいつのまにか通り過ぎてしまった。ダム本体はすでに取り除かれていたので気が付かなかったのだ。通り過ぎてから慌てて撤去跡をズームにして撮った（写真右）。ダムがあるとその上流は一般に水が溜まって流れのほとんどない湛水区間が続くのであるが、それは全く無く、すでに瀬と淵のある本来の川の姿に戻っていた。アユの生息場が回復していることは車窓からでもわかる。アユだけでなく河川生態系の回復がなされているだろう。自然の力はすごいものだと実感した。

さらに列車は川伝いに球磨村地域を走る。日本三大急流と言われるだけあって流れが速い。川幅が狭いのにも流量が多いために急流になるのである。川幅が狭いのは周囲（ここでは山地）の地盤が固いため削られにくいのだろうか？ 小砂利の河川敷があまりない。それに代わって岩盤が多い。また、流量があるのはこの地域は雨量が多いからだろう。感激も冷め遣らぬ間に大きなダムが現れた。瀬戸石ダムである。これより上流は水が池のように溜まってほとんど流れていない。いわゆる死に水である。この状態が相当の距離続いた（写真右上）。ここは撤去の声は上がっていないのだろうか？ 人吉の町に近くなると山



が開けた。大きな盆地である。かつては湖であったという。川幅は広くなり、流れが緩やかになっている。この時期でも、まだアユ釣りをされている釣り人をちらほら見かけた。人吉駅からは三セクのくま川鉄道に乗りこしてみた。湯前駅まで人吉盆地を走った。ちょうど実りの秋にあたり一面の田んぼが黄金色に輝いていた。まさに球磨川の恵みがもたらした穀倉地帯である。そのイメージを演出する目的もあるのか乗車した列車は「田園シンフォニー」(写真右)と名付けられていた。



いつもそうだが、今夜も格安のビジネスホテルに泊まった。このホテルは同じ建屋にお風呂屋さんも経営していた。番台にクマモンが迎えてくれた。古びた脱衣場に温泉の証明書が張ってあった。ここも立派な人吉温泉だ。泉質はナトリウム・炭酸水素塩・塩化物泉と記されていた。すべすべ感があるもので一般的に美人の湯として知られている。いい湯だった。



夜は駅前の居酒屋に入り、球磨焼酎にからしレンコン、麦味噌のかかった豆腐(球磨川上流五木村産)、馬肉焼きをいただいた。焼酎のオーダーは一合、二合でと言われたのには驚いた。



一夜明けて、今日は肥薩線の続きである人吉駅から隼人駅まで乗車する。県境の山間部を走ることからか山線と呼ばれている。人吉駅を出発してしばらくするとディーゼルエンジンがうなり出した。急こう配に入ってきたのだ。しばらく進むと大畑駅に入り、鉄道ファンに人気のあるスイッチバック区間が現れた。運転手さんが列車を一旦止めて運転席を離れ最後部の運転席に移動し、今度は列車が逆走した。これを二回繰り返した後、ループになった軌道を登り始めた。勾配のきついところの走り方である。標高 536.9m の矢岳駅を越して矢岳峠に差し掛かった。ここからの車窓は絶景である。霧島連山の大パノラマである。一見の価値ありだ。根室本線の狩勝峠と篠ノ井線の姨捨駅付近と合わせて日本三大車窓と言われている。峠を超えると一気に下りとなり、先ほどのうなりが無くなりスピードが増した。そして今回の目的地の最寄り駅である霧島温泉駅を通過して、さらに明治時代に建てられたレトロな駅舎として有名な嘉例川駅を過ぎ隼人駅に到着。今回はもう一つの未乗車区間である吉都線(吉松駅～都城駅)に都城から乗車して、再度、霧島温泉駅で下車して同窓会会場に向かった。肥薩線は、もともとは鹿児島本線の一部であったが新しく沿岸部に本線ができたことで、その後はローカル線となり手がかけられず放置されたが、逆にこれでレトロな駅舎や多くの設備・施設がそのまま残ったらしい。今はそれを観光に活用している。「SL 人吉」、「いさぶろう」、「しんぺい」、「はやとの風」、「かわせみ」、「やませみ」と多くの観



ミニチュア模型のような真幸駅

光列車が走っている。たしかに魅力のある路線だと思った。世界遺産も考えているとか・・・。

<同窓会>

同窓会のある霧島国際ホテルは霧島錦江湾国立公園の霧島温泉郷にあった。部屋からは霧島連山、そしてはるか向こうに桜島も見えた（表題の写真）。周囲はいたるところから湯けむりが立ち、まさに温泉情緒満点である。高温の泉源があるところは湯けむりが立つという。早速温泉に入った。泉質は単純硫黄泉。硫黄臭がする温泉は我々にとって最も温泉を実感する泉質の一つである。私は水道水の水質検査に関わったことがあるので温泉の泉質には少し興味がある。

今回は O 夫妻に三人のお嬢さまも参加していただき、若さ溢れる華やかな同窓会となった。今までに数ある同窓会でもこのようなことは初の体験だ。三人のお嬢さまは、明るくて爽やかで、いろいろお話しをしてくれたし、我々のお話しも聞いていただいた。そしてなによりもお酌までしていただいた。かつてはそうだったように思うが、今でも九州は男を立てるという気風があるのかな。楽しい家族の雰囲気をととても感じた宴だった。部屋に戻って再び飲み直し。何を話したのかははっきり覚えていないが、お嬢さまがオジサンたちの話しは面白かったと後で聞いて一安心であった。



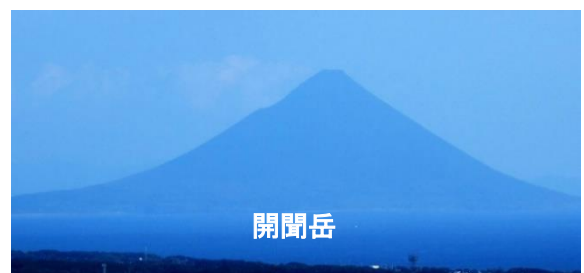
O 夫妻・お嬢さんと記念写真

<足を延ばして枕崎、坊津そして吹上浜へ>

翌日は O 夫妻の案内で知覧特攻平和会館を訪ねた。第二次世界大戦末期の沖縄戦において特攻という人類史上類の無い作戦で、爆走した飛行機もろとも敵艦に体当たり攻撃した陸軍特別攻撃隊員の遺品や関係資料が展示されている。長崎出身の NT 氏は泣けてくるので参加しないとのことだった。亡くなられた 1036 名の隊員の家族知人に残した遺書・手紙・辞世・絶筆を目にした時は彼の言ったとおりであった。その後、私の今回の旅の目的の一つでもある指宿枕崎線の乗車計画を察してか車で枕崎まで送ってくださった。

台風接近時はここからの生中継がよく全国放映されるので、名前はよく聞くが訪れたのは今回が初めてであった。町に入るとあたり一面に燻煙の臭いが漂っていた。カツオ節作りからのものだとわかった。そして燻煙に使うのであろうマキが至る所に大量に積まれていた。まさにカツオの町であった。地元の人には失礼な言葉になるが、南の最果て駅「枕崎」である（写真右）。一方北の最果て駅は「稚内」である。いずれも JR 全線制覇を目指す者にはいつも頭に浮かぶ大きな目標の駅である。

枕崎駅で記念撮影をし、指宿枕崎線に乗車。しばらくすると薩摩富士と呼ばれる非常に美しい開聞岳（標高 924m）が見えてきた（写真右）。途中、開聞岳を望む JR の最南端駅の西大山駅ではたくさんの観光客に出くわし



た。砂風呂で全国的に有名な指宿駅からはアジア系の外国人がたくさん乗車してきた。大阪では多く見受ける彼らだがここでも多いのに驚いた。鹿児島中央駅に着くと驚いたことに O 夫妻が再び改札口まで出迎えてくれた。今回は何から何まで至れり尽くせりの幹事さんに感謝、感謝であった。

私は、NS 氏ともう一日、鹿児島を観光した。彼は大学卒業後の最初の勤め先が鹿児島市内であった。鹿児島一の繁華街、天文館通を案内していただいた。昨日の飲み過ぎがまだ回復しない中、さつま料理を少々いただいて一杯やったが、黒豚も地鳥も地魚もすべて新鮮で絶品であった。



吹上浜

翌日の最終日は、彼に吹上浜（写真右上）を案内していただいた。前から一度行きたいところであった。薩摩半島西岸に位置し東シナ海に面する長さ約 47km の砂丘海岸は日本一の長さで日本三大砂丘の一つとされている。素晴らしい砂浜が地平線まで続いているように見えた。釣り好きの私は早速竿を出している方の釣果を覗いてみた。パールピンクの魚体がとても美しいキスが釣れていた。こんな広大な砂浜で竿を思いっきり振ってみたくなった。釣り荒れなんて全く無いようなシチュエーションであった。



双剣石（坊津）



坊津港

まだ、時間的に余裕があったので、昨日、列車の都合で行けなかった坊津に行った。ここは枕崎から海岸伝いにさらに西へ、陸地の果てにある。断崖絶壁に囲まれた天然の良港は海外からみれば最も日本に近い場所でもある（写真右）。そのために日本の古代から長期に渡って、海上交通上の要地であり遣唐使船の寄港地や密貿易の拠点として栄えた。安濃津（三重県津市）・博多津と共に日本三津^{さんしん}に挙げられている。ちなみに奈良時代（754 年）に鑑真が渡日 6 回目にして、現在の坊津（秋目地区）に上陸している。また、1549 年にはフランシスコ・ザビエルが日本に上陸した地でもある。

再び鹿児島市に戻る途中、NS 氏が昔お世話になった上司を突然に訪ねることとなった。お世話になったのは学校を出た時のらしい。家はわかったものの主は不在であった。お年は 90 歳を超えているとい

う。お住まいの気配からここを離れて病院とも想像できた。この訪問も月日を感じさせた。その後、彼の旧知が営んでいる天文館通近くの喫茶モーツアルトへ。ここで立てていただいたコーヒーは抜群の味であった。さらに近くでとても美味しい黒豚カツ丼を食して、再会を誓い別れた。その後、私は今回の旅の総仕上げとして「維新ふるさと館」で薩摩藩が導いた近代日本の夜明けを少々真面目に勉強し帰路についてた。

<旅での気づき>

今回の旅で気づいたことなどをお伝えしたいと思う。まず一つ目に、友との繋がりが有難いことを改めて実感した。私から見れば40年以上前という遠い時代の、そして遠方にある友との交流が今も続くとは夢にも思わなかった。長い間、交流は希薄になっていたが、退職近くになった5年ほど前から活発になってきた。あとしばらくで、実感できるだろう解放感に対する想いの一つが、「あの日にもう一度帰りたい、その帰りたい先は青春を過ごした時代、そして帰るならみんな一緒に帰ろう」なのだろうか。それが同窓会なのだろうか。

二つ目は前述したように球磨川は大きな鮎（尺アユ）が釣れることで私も含めて全国のアユ釣りファンには憧れの川なのだ。昨今、日本のアユの川が劣化して思うような釣りができず、釣り離れも進んでいる。その原因の一つにダムの問題がある。アユにすれば百害あって一利なしである。そのダム、それも大きなダムが撤去されることに驚きを感じた。そしてその経過を調べてみたくなった。資料はたくさんあった。事業主体の熊本県はH24年からの工事の進捗状況をHPで丁寧に報告している。先鞭をつける事例となることを認識されていることだろう。その他、関連する多くの論文もインターネットですぐに見つかる。水環境に関心ある方は是非ご覧いただきたい。



私は地元の多大な協力を得て完成したダムが地元の強い要望で撤去されたのはごく自然の流れとだと思ふ。それは時の経過とともにダムの効果（発電等）よりも弊害（①河床上昇による水害の増加、②富栄養化に伴う水質の悪化、③ダム放流に伴う振動被害、④アユ・ウナギに対する悪影響等）が多くなってきたことを地元が肌で感じ取られたのだろう。そして何よりも球磨川と地域社会との関係を考えるうえで欠かせない存在であったアユがこの方向へ誘導するための大きな存在だったように思う。民主党政権にあったコンクリートから人へ、長野県の脱ダム宣言、今では影を潜めた感もあるが、撤去に対する地域の強い想いなどの状況が整ったところはこのように実施されている。これで全国の川への波及の期待が幾分でも膨らむだろう。三つ目に私は普通列車によるJR全線乗車を目指しての旅をしている。今までに80%程度は走破した。何年もしていると日本の車窓からの景色の移り変わりがよくわかる。今回の旅で感じたことは、太陽光発電のパネルが車窓からたくさん見えだしたことであった。個人宅の屋根にも、そして最近空き地にも……。九州地方は日照条件が良いのか特に多い。太陽光発電には現職の頃の懐かしい思い出がある。地球温暖化対策として太陽光発電普及のための仕事をしていた時がある。補助金

をつけて町に太陽光発電パネルを1万世帯、そして10万世帯に普及させようというものであった。その関係で国にも足を運んだが、当時は新幹線から太陽光発電パネルが見える景色は皆無であった。それではと、まず自宅に設置したが、高価であったためにハウスメーカーからも積極的には勧められなかった。

しかし、売電の買取り価格を上げるという時の流れの後押しもあり、設置後6年で売電収入が設備投資費を上回り、今は稼いでくれている。当初の設置目標数には達していないと聞いているが右肩上がりで普及していったことは確かである。今回の旅で、多く目に止まった光景を見ると感慨深いものがある。やっぱり政策は大切だと実感した。東日本大震災以降、原発の事故が気になり出した。今の原発立地安全評価は地下の活断層の議論が中心になっている。新たな課題として今はそれにプラス他国から、さらにはテロからの攻撃も考えなければならない。これらによる破壊は予測不可能である。脱原発も真剣に考えなければならない時代になったと思う。そのためにも太陽光発電は一層普及して欲しいものだ。



<荒瀬ダムに関する参考資料>

●【熊本県企業局】荒瀬ダム撤去 HP <http://www.arasedamtekkyo.hinokuni-net.jp/index.htm>

●消えゆく球磨川・荒瀬ダム（川の流れ再生の予兆） 岩井郁次郎

水資源・環境研究 Vol.27, No.2 2014 岩井 pp.51～56

●ダム撤去を通じて地域と河川の環境を再考するー荒瀬ダム撤去の政策過程と社会的影響の解明に向けて
大野智彦 社会と倫理 第31号 2016年 p.181-199

